

独立行政法人評価委員会
第22回沖縄科学技術研究基盤整備機構分科会
議 事 録

内閣府沖縄振興局新大学院大学企画推進室

独立行政法人評価委員会

第 22 回沖縄科学技術研究基盤整備機構分科会

議 事 次 第

日 時 平成 23 年 8 月 8 日（月）13：30～15：42

場 所 中央合同庁舎第 4 号館 2 階共用第 3 特別会議室

1. 沖縄機構からの補足説明
2. 平成 22 事業年度業務実績の評価
 - 項目別評価表
 - 総合評価表
 - 中期目標期間の業務実績に関する仮評価表
3. 平成 22 事業年度財務諸表
4. その他

○平澤分科会長 それでは、時間になりましたので、第 22 回の分科会を開催したいと思います。

我々が沖縄にお訪ねしたときに、非常に適切な御案内をいただきまして、機構の皆様どうもありがとうございました。それから、日程をセットアップするに当たっては、担当の内閣府の方たちにもいろいろお世話いただいたというふうに思います。重ねて御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

今日は、本当にお暑い中、ここに集まっていただきまして、昨年度の評価をするということになります。

議事に入ります前に、関係の方たちからごあいさつをいただきたいと思います。

まずは、大辻沖縄振興局長からお願いします。

○大辻局長 先生方、本当に今日は相当暑いですし、湿気も多いという息苦しい中をお越しいただきましてありがとうございました。

それから、先ほど平澤先生の方からお話がありましたように、御視察は台風の時だったかと思いますが、大変な気候の中、現地での評価の準備作業をしていただきましてありがとうございました。

先般、前回の分科会の後、新聞報道等もございましたけれども、佐藤主任研究者の研究グループのサンゴのゲノム解説という、いい意味で素人目に見てもわかりやすいような、研究発表の記事が出ておりました。こういったことから、準備研究段階から徐々に成果が出つつあるんだろうと私自身思っております。

ただ、先般申し上げましたように、注目度が高まってくれば高まるほど、どういう教員を採用していくのかとか、どういうガバナンスでやっていくのかとか、どういうふうに成果を普及していくのかとか、さまざまな今まで割に抽象的に議論していたようなものを今後具体的にどうしていくかということが目の前に迫ってきているというのが現在の状況だと思います。

今回の評価は、機構の丸一年間の事業年度の評価としては、最後の評価ということだと思いますが、先の仕組みで成果が上がっていくという面も含めて、本当に重要な時期だと思いますので、是非とも今日もよろしく願いいたしたいと思います。

○平澤分科会長 どうもありがとうございました。

続いて、7月末に着任された岩井室長から一言ごあいさつをお願いします。

○岩井室長 ただいま御紹介にあずかりました、7月29日付で事業振興室長及び新大学院大学企画推進室次長を拝命いたしました岩井と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は誠に大変お暑い中、またお忙しい中、この分科会のためにお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

私は、厚生労働省からの出向ということでございますけれども、このような大学の関係の仕事は初めてでございますが、この沖縄の大学院大学につきましては非常に大きな国家

的なプロジェクトでございますし、国内的にも非常に新しい取組であり、国際的にも非常に開かれたスタイルだと思っております。こういったものに対してまた一生懸命取り組んでまいりたいと思っております。

本日、22年度の業務実績の評価と、あとは中期目標期間の仮評価ということをお願いすることとなります。引き続き皆様方の御指導をいただきながら、また御意見を踏まえて、機構の皆様とも連携しながら、この開学の準備を進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○平澤分科会長 どうもありがとうございました。

それでは、最後にバックマン理事から一言ごあいさつをお願いします。

○バックマン理事 今回、また私ども OIST の最近の状況について説明をさせていただく機会をいただきましてどうもありがとうございます。

まず、先ほどの的確におっしゃっていらっしゃいましたけれども、今、私どもは、当初、夢というレベルの構想であったものが現実的なものになりつつあるという重要な局面に差し掛かっていると思います。

皆様の評価結果に影響をもたらすようなことを言うてはいけないと思っておりますけれども、着実に前進を遂げていると思っております。

もし、何か御質問あるいは懸念事項があれば、私どもがいる間に是非、何なりと御質問いただければと思います。

本日はよろしくお願いいたします。

○平澤分科会長 どうもありがとうございました。

それでは、議事に入りたいと思いますが、その前に事務局の牧野専門官から資料についての御説明をお願いします。

○牧野専門官 それでは、本日の議題と資料について御説明したいと思います。議事次第と、その次第の下に配付資料一覧が付いておりますけれども、そちらの方をごらんいただければと思います。

本日は、主に3つ議題を挙げさせていただいております。まず、議題1ですけれども、「沖縄機構からの補足説明」ということでして、平成22年度の業務実績及び財務諸表については、既に前回の分科会及び現地視察において沖縄機構の方から説明を行っていただいていたところですが、これらに関する補足説明を沖縄機構の方からしていただきたいと思っております。また、評価等に当たって追加で説明が必要な事項等がありましたら、ここで質疑を行っていただきたいと思いますと考えております。

資料ですけれども、項目別評価表の後ろに添付資料というものを前回の分科会から追加する形で入れております。この資料を使って説明をしていただきたいと思いますと考えております。

なお、業務実績の評価等については、委員のみで審議を行っていただくこととしておりますので、機構にはこの補足説明の後に退席していただくというような形を考えております。

次に議題 2 ですが、平成 22 年事業年度業務実績の評価」ということでして、資料として平成 22 年度の項目別評価表と総合評価表及び第 2 期中期目標期間の仮評価表、いずれも案ですが、お配りしております。

資料 2-1 ですが、こちらが項目別評価表の案ということで A 3 の大きな紙のものになっております。事前に委員に評価の方を記入していただいております。分科会委員評価として右側の欄に記入しております。確認となりますが、委員の協議により評価をするとされている評価項目について、満足のいく実施状況については A、ほぼ満足のいく実施状況は B、やや満足のいかない実施状況は C というような感じで評価を付けることとなっております。また、特に優れた業務実績を上げていると判断できる場合には A + を付けることができることとなっております。

本日は、この委員評価の欄の右に分科会評価という欄がありますけれども、このそれぞれの項目について分科会の評価を決定していただくというふうに考えております。

更に、その右の備考の欄でございますが、委員からいただいたコメントをかぎ括弧付きで記入しております。また、政独委の評価の視点等や、これまで委員の先生方からいただいた御指摘等を踏まえた形で、事務局においてかぎ括弧のないコメントを整理させていただくような形で書いております。

それから資料 2-2 ですが、「総合評価表（案）」をお配りしております。これまでの分科会における御審議ですとか、項目別評価表に記入していただいた御意見、コメント等を踏まえまして、事務局の方で原案という形で取りまとめさせていただいております。

その次が資料 2-3 ですが、「中期目標期間の業務実績に関する仮評価表（案）」というものをお配りしております。前回の分科会でも御説明したところですが、現在、沖縄機構は平成 21 年度から始まる 3 年間の第 2 期中期目標期間の最終年度に入っております。予定どおり本年 11 月に学園が設立された場合、独立行政法人である沖縄機構は学園設立と同時に解散することになっておりまして、機構解散後に解散までの最終の平成 23 年度事業年度の評価及びこれまでの中期目標期間の機構の業務実績の評価を行わなければならないということが学園法上定められております。この中期目標期間の業務実績の評価を機構解散後、円滑に行うために、中期目標期間の業務実績に関する仮評価ということで、本来、平成 21 年度から 23 年度までの 3 年分の評価を行うところを、仮の評価として 22 年度までの 2 年分の業務実績の評価を行うということが本年 2 月の親会議の方で決定されております。

それで、資料 2-3 ですが、仮評価の案ということで、昨年度の評価、項目別評価表に記入していただいた御意見等を踏まえて事務局の方で案を取りまとめさせていただいております。

総合評価表については、本日の分科会で評価を決定して、17 日の親会で平澤分科会長から御報告いただくということになっておりますが、こちらの仮評価の方につきましては、分科会で評価の原案を作成した後、分科会長から 17 日の親会に諮っていただいて、

親会の方で最終的に決定するというような形になっております。

議題3ですけれども、「平成22事業年度財務諸表」についてということで、前回お配りしたものと同じものですが、財務諸表とその概要をお配りさせていただいております。

主な議題は以上ですけれども、このほかに資料4として今後のスケジュールを簡単にまとめたものをお配りしております。

議題及び資料については以上ですけれども、資料で不足しているもの等がありましたら事務局までお申付けいただければと考えております。以上です。

○平澤分科会長 どうもありがとうございました。資料等、おそろいでしょうか。

それでは、第1の議題でありますけれども、まず沖縄機構からの補足説明をいただきたいと思います。我々が訪問したときにも多少の宿題をお願いしたかと思いますが、それを含めてもう一度、御説明等をよろしくお願いいたします。

○バックマン理事 ありがとうございます。

2つの宿題を主にいただいております。この会計年度における主要な活動である教授陣の採用について進捗状況を報告せよというのが1つ目の宿題でございます。

私どもの教授陣採用活動においては、新しいポジションについて広く情報を提供し、それに対して約500人以上の方々、研究者から応募がありました。

非常に慎重にその経歴を審査した上で、約50人の研究者に面接を行うために沖縄に来てもらいました。それぞれ約3日間滞在していただきまして、各研究者から研究セミナーを実施してもらい、そしてOISTのメンバーと交流をしてもらいました。

このようなプレゼンテーションの内容の検討、それから研究者たちのOIST滞在期間中に行われたさまざまな審査の結果を勘案いたしまして、応募者の中から合計26人を教員最終候補者と決定しました。

お手元にあります添付資料が、教員予定者をまとめたリストです。上述の26人に対して採用のオファーを行いまして、そのうち22人がOISTで教員として仕事をすることを承諾してくれました。

先ほど言い忘れましたけれども、この各教員予定者からは、3通、あるいはそれ以上の独立した外部機関からの推薦状を提出していただいております、それも審査の内容に入っています。

このリストには、以前どこの大学・研究機関で研究を行っていたかということが書いてありますが、元の所属機関を見ていただきますと、世界でも有数の大学・研究機関で勤めていたということがわかりいただけたと思います。

教員の約半数、12人ですけれども、物理科学の専門家です。今年度のOISTの教員補充の重点は、従来の生命科学の分野から物理科学の分野に研究分野を更に強化・拡大しようということで、物理学の研究者がこれだけおります。

以上が、私どもの会計年度中における教員採用活動の主な結果でございます。何か御質

問があれば、自由に聞いていただきたいと思います。

○平澤分科会長 今回のことは１点だと思いますが、そのほかに関して、もし御説明があれば、合わせて伺った上で御質問したいと思います。

○バックマン理事 もう１つ宿題としていただいておりますのが、うるま市にございます施設について、この資産、施設の説明をするようにということです。

添付資料に、OISTの実物資産の一覧が載っています。下に書いてありますのが、22年度以降、借用を終了した実物資産です。そして、今会計年度中も引き続き使用中の資産をページの上の方に列記しています。

今、私どもが特に注意していただきたいのが、うるま市にございます沖縄科学技術研究交流センター、そしてその下の沖縄県工業技術センター（別館等）でして、これは引き続き借用中でございます。

私どものこの２施設に関する方針といたしましては、この会計年度中も引き続きこの借用を続けて、そして来年度の予算の額、それからキャンパスにおける収容可能なスペース等を十分に勘案した上で、今後の借用の要否を判断していくということです。

最終決定をすることができ次第、内閣府の関係者と相談をした上で、１年借用した上で終了するか、あるいは更にもう１年借用を続けるかを決定し、取り決めをしていきます。

いただきました宿題の結果は以上のとおりでございます。何か御質問があればお受けしたいと存じます。

○平澤分科会長 ありがとうございます。機構の側からほかに何か説明しておきたい、付け加えておきたいということがあれば、この際伺っておきたいと思いますが、いかがでしょうか。

とりあえずはよろしいでしょうか。ありがとうございます。そうすると、今の２点を中心にして、重ねて機構の側にお尋ねしたいことがあれば、御質問を委員の先生方からお願いいたします。

第１点ですけれども、我々が沖縄にお伺いしたときに、確か29人の枠を候補者として考えて、そのうちの2人はまだ回答していない。それから、2人が最終的には沖縄には来られないという結論になっている。確かそのような状況だったかと思っております。これはもし違っていれば訂正いただきたいんですが、あえて御説明いただかなくてもいいかもしれませんが、その着任することを断念された2人の方というのはどういうことが主な理由になっていたんでしょうか。

○バックマン理事 まず、数の確認をはっきりしておきたいんですが、26人に対してオファーを出しまして、22人からはイエスという回答をもらいました。そして、2人がノーという回答、そして2人がまだ答えを出していないで検討中という状況でした。

この、ノーとお答えになった2人のうちの1人の研究者は御夫婦でどちらも研究者でいらっしゃるしまして、私どもがオファーを出したのは御主人の方です。奥様の方が、今年ちょうど博士号を取得したばかりでした。奥様の方も沖縄の施設、そして利用可能なリソー

スをごらんになってこれに大変魅力を感じていただいたようなんですけれども、この OIST の新しい施設の供用開始はかなり先になる予定でして、今年は完成せず、来年もかなり先にならなければ供用を開始できる予定にはなっていません。

彼女は、結局この 2 年から 3 年の任期でカリフォルニア工科大学のオファーをアクセプトしておりまして、その後、もう一度、沖縄に来て研究を行うかどうかを検討しようということになっています。ですから、御主人は非常にやる気満々でいてくださいましたので、今後、奥様が来られるようになったら是非沖縄に来たいということを書いていました。

もう一人、断られた研究者もやはり御夫婦で研究をしている方ですが、今の段階では家族で満足のいく形で住む施設が完成しておらず、家族がそこで一緒に住んでいく、生活をしていくための環境が十分ではないということが一番の理由でした。

まだ 2 人からは回答待ちですけれども、そのお 2 人もそれぞれ個人、御家庭の事情でなかなか沖縄に来ると即答できない状況で、近々回答をいただく予定であります。

だれも OIST が嫌だから絶対に来たくないということは書いておられません。少なくとも、私たちにはそのようには申されませんでした。

○平澤分科会長 どうもありがとうございました。

オファーを出した大部分の方が来てくださったということで、この採用活動は非常に成功裏に進行していると言っているのではないかと考えていますが、今まで何年かにわたって我々が議論してきたように、やはりファミリープログラムであるとか、その居住に関わるサポートであるとか、こういうことが充実していないと、やはりトップレベルの人を招聘するのはなかなか難しいというのが現実になったと受け取っていいかと思っております。

先生方から、御質問やコメントはありますか。

○遠藤分科会長代理 今回の採用のことですけれども、一応この状態でとりあえず大規模な積極的な採用活動は一旦終わりということですか。

○バックマン理事 研究評価の結果によっては既存のファカルティの何人かは OIST を去ることになりますけれども、とりあえず第 3 研究棟が完成しないと、更に採用をどういうふうに行っていくかというのを判断することはできません。

○遠藤分科会長代理 というのは、26 人にこちらがイエスを出して、今のところ 2 人だめで、もう 2 人もちょっとわからない。そうすると、予定していた戦力が不足してくるということも考えられるんじゃないかということで今、聞いたんですけれども。

○バックマン理事 私どもの意向としては、また別の研究分野における研究者の選考活動というのは続けていきたいと思っております。その研究者を収容するのが、この第 3 研究棟です。

私たちとしては、更に研究者を確実に選考、選任していくためには、施設の利用が可能になっているということが必要だと思いますが、今、うるまの施設はありますけれども、ここに収容するスペースというのは限られています。ですから、更に教員を採用する前に、

どういうふうに予算が付いて、施設を確実に整備していくことができるという見当がついてから、採用活動を再開したいと思っています。

もう一つ、今年この採用対象となった教員の方たちが非常に重要視したことなんですけれども、やはりこの第2研究棟が建設中であったということが非常に重大な要素となりました。

次に本格的に教員採用活動を実施する際には、今度は第3研究棟が必ず完成するということを研究者に見せることが、採用活動を成功させるために重要だと思います。

○遠藤分科会長代理 すみません。私の質問がちょっとおかしかったと思うんですけども、オファー出した候補者数から最悪4人不足するわけですね。その4人足りないままで構わないんですねということが1つあったんです。

○バックマン理事 大学院大学の課程として、現在の就任予定教員だけでも十分な状態でありまして、勿論、更に研究者が来てくれればそれに越したことはないんですけども、更に増やすには、十分なプランニングを行った上で採用していく必要があると考えています。ですから、大丈夫だと思います。

○遠藤分科会長代理 わかりました。安心しました。

○平澤分科会長 他にいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

今のことに多少関連するのですが、御説明いただいた内容とはちょっと違うことで、先回やはり御説明くださったんですけども、5年ごとに主任研究者を評価していたわけですが、今回は移転等のことがあったのでそれを延期したというように伺っております。これについては、今年度の適切な時期に行われることになっているのでしょうか。また、それは何人になりましょうか。

○バックマン理事 もう評価を始めておりまして、今年度は約9人が対象となります。

○平澤分科会長 ほかによろしいでしょうか。

もう一つの御説明いただいた内容、実物資産について、つまり主にはスペースをどのように確保しているかということに関係してですが、先ほどのまについては今年度継続して保持しておきたいということをおっしゃられました。今回は昨年度の評価ということなので、昨年度の実績の中にはこれを継続して今年度キープするかどうかということは余り考えなくてもいいかと思っているんですが、昨年、第1研究棟ができて移転し、そして一部の空いた部分というのは既に返還したということになっているわけですね。

残りの部分は、第3研究棟との兼ね合いでキープしたままになっているということかと思いますが、もう一度まとめて言いますと、この空きスペース云々ということは今やる評価から除いておいていいかと思いますが、将来計画との関係で適切かどうかということは多少意見交換してもいいかなと思っています。いかがでしょうか。

これは、実際に沖縄県の方でこの施設を使いたい、使う予定があるというような状況になっているのか。それとも、比較的ゆとりがあるので特に急いで返してもらわなくてもいいという状況なのか。この辺りはいかがなんでしょうか。

○高野事務局長 今回の御質問に関しましては、文部科学省に対して大学の設置認可申請をいたします際に、この借りている部分につきましても当面、最低10年間以上お借りすることができるのかどうか、認可申請との関係で家主の方に確認をした上で申請書類の一部として添付しております。

当面、10年間を目途に、OISTが必要であるならば教育研究のために使っていただく、貸していくということについて差支えがないという回答を県、または家主である県の外郭団体からは得ております。

○平澤分科会長 開学する大学院大学の施設の広さとして、第3研究棟がもし建たない場合には一定程度の面積が必要になるので、その分を代替的にここで確保する可能性があるかということの確認かと思えますけれども、そういうふうに理解してよろしいのでしょうか。

○高野事務局長 私どもとしまして、第3研究棟が建たないという想定はいたしておりますけれども、いつごろどういう形で着工し、完成するのかというのは考える必要がございますし、それまでの間、必要な教育研究のためのスペースというものを確保する必要があります。そのために3月の認可申請の時点でも相手方とやり取りをして、確証を得た上で確保をしているということでございます。

ただ、第3研究棟が速やかに着工し、完成するという見込みが立った場合には、それとの見合いで今、借りている施設についても当然家主とお話をした上でお返しをするというのが順当なことだろうと思っております。

○平澤分科会長 今回の件に関しまして、何か更に御質問はありますか。

○遠藤分科会長代理 ちょっと杞憂かもしれませんが、そういうお話をすると、あと何年間か借りてくれるなど貸主は思いますよね。予定されちゃうと、後で困ったことにならないようになっていくかなということで、何となく気になりましたけれども。

○高野事務局長 その点につきましては、県及びその家主との関係では、我が方のキャンパス整備の状況、予定というものもよく話をしておりますので、誤解はないというふうに考えております。

○遠藤分科会長代理 でも、あと何年間借りてもらえると必ず思っていますね。

○高野事務局長 そういうことはなくて、第3研究棟はできるだけ早い時点で完成を目指すということで県の方も認識は共有していると思いますので、間違いはないと考えております。

○バックマン理事 過去の経験で、その下の段に出ております借用を終了した実物資産、これは既に所有者にこれをお返ししているわけですが、今までOISTが研究ラボとして使っていたスペースでは、今も沖縄県と共同で研究を行っております、そして内閣府がスポンサーを務めております非常に重要な活動である研究開発クラスター、R&Dクラスター形成のために使用されています。

ですから、そういう意味で私たちがこの研究室、ラボのスペースとしてはもはや第3研

究棟が完成して使う必要がなくなったとしても、今までの施設の使用実績を考えますと、十分に有用な使用実績をその後も上げていくことができると思っています。

田中統括の方から補足をしてもらいたいと思います。

○田中総務グループ統括 今、バックマンの方から説明いたしましたのは、既に昨年度、返却をしております施設の一部が、昨年度から始まっている知的クラスター形成に向けた研究拠点構築事業という沖縄県の事業の中で、既に地元のベンチャー企業なども入居して研究開発活動が行われる形で、引き続き研究施設として使われているということでございます。

○平澤分科会長 今の部分には、OIST の研究者のアクティビティは関与しているんですか。

○田中総務グループ統括 知的クラスター形成事業の中で、OIST との共同研究というような形で実施されているという状況です。

○平澤分科会長 そうすると、これは第3研究棟が建つにしても、しばらくは続くというふうに考えた方がいいわけですね。

ちょっとうろ覚えですが、第3研究棟ができた後、更にそういう民間企業との共同研究をするような施設をつくるような計画もあったかに思うわけです。これはどこまで実現するかはわからないけれども、そういうものはできるまではうるまで共同研究というか、知的クラスター事業というのが続くというふうに考えればよろしいのでしょうか。

○竹内理事長補佐 遠藤委員の御心配に若干補足説明をいたしますと、県もやはり国と同じ単年度主義ですので、原則そういう契約は1年ごとに更新していく。

これが原則ですので、正直、10年という文言は県の方でもかなり抵抗があったわけですが、その辺は認可申請上やむを得ないということで御理解をいただいて、何とかその辺の処理をまとめたという経緯があります。あくまでも年度ごとにその辺は見直していくのが原則であり、いつまでも同じ状態が続くとは思っていないと考えております。

○平澤分科会長 今、議論した2点、新規採用の部分とスペースの件のほかに、何かこの際、機構の側に確認しておくことがありましたらどうぞ。よろしいでしょうか。

それでは、第1の議題である機構からの補足説明に関してはこれで終了したいと思います。どうも機構の皆様、ありがとうございました。これから先は我々の側で議論を深めたいので、恐縮ですが、御退席をお願いします。それから、傍聴の方はそのまま残ってください結構です。

(沖縄機構関係者退室)

○平澤分科会長 それでは、評価表に沿って議論を進めていきたいと思っています。

皆さんのお手元にある資料で最初から区分ごとに見ていこうかと思いますが、総括的に言えば今回、分科会委員の方の意見は割れた部分がないようですね。それで、余り面白くないと言うとあれなのですが、オールAというようなことになる。私も大分どこかがBでどこかがA+というふうにならないかと思ったのですが、どうもすべてAという結果になっているんですけれども、個別に議論した方がやはりよろしいのでしょうか。

今回は珍しく余り問題なく、本当に最後にこういう状況になって幸せだと私は思っております。どこか議論した方がいいというところがあればそこでストップしたらと思います。資料2-1の最初から見ていきましょうか。

「科学技術に関する研究開発」に関係した部分で、研究活動についてどのようになっているかということです。ブロックの番号で言うと、1と2と合わせて評価するということになるわけですね。

それで、これについては我々が沖縄に出かけたときには、個別のアクティビティだけではなくて組織全体で横ぐしを通したようなアクティビティがあるといいのではないかと、いうことを申し上げていたと思います。それに関して、もしコメントを更に付け加えるとすれば付け加えてもいいかもしれませんが、ドーファン先生からのそのときのお答えでは、生物的な試料を対象にした非常に高度な画像処理のテクノロジーというのが独自に開発されて、それは非常に大きな資産になるだろうという御説明がありました。

これ自身は私も納得はするんですけども、もう少し手段ではなくて対象の側で横断的に取り組むような課題があるとインパクトが大きいのではないかと、思っているんですけども。

○遠藤分科会長代理 それは、今度新しい教授陣はかなり違う分野の方も採用されたので、22年度としてはかなり広い分野にわたったテーマというか、それが可能になったというレベルではないのでしょうか。22年度としては。

○平澤分科会長 そうですね。22年度としてはそういうところでしょうね。そういうようなことだとすれば、ここにある程度のコメントということで、Aということでもよろしいですね。

それから、次に3ページにわたりますけれども、ブロックナンバーで言うと3から7までですか。採用ですね。これについてはいろいろ御説明があったとおり、順調にいったということでもよろしいわけですね。これはむしろA+でいいくらいですね。

○遠藤分科会長代理 私も、A+じゃないかなと何となく思います。

というのは、あんなに立派な人が集まるというのは、本当にそこまでいくのかなと思っていたんですけども、これは見れば見るほど立派な人ですね。ひょっとしたらA+じゃないかなと、私も実はちょっとメモを書きました。

○平澤分科会長 いかがでしょうか。特に欠陥になるようなことは何もなかったように思います。それで、随分危惧していろいろな点について注文をつけてきたわけですが、ふたを開けてみたらすべてうまくいったという感じですね。

○伊集院委員 そうですね。先ほどのバックマン理事からの御説明で、ノーと言われた方の理由もよくわかりますし、それからちょっと保留という2人の方々を含めまして、それはやむを得ないというようなことであろうと思います。

一方で、ただ、もう一つはその4人の方を採用のつもりがそういう結果が出たということは、物理学の御専門の方々が今回は多い中で、多岐にわたる専門分野というような意味

で、その4人がどんなふうにもバランスの中で位置付けをされている方だったのか。その辺がちょっと気になりまして、どうなんだろうということをおもいました。

ただ、4人の方がおいでにならなくてもこの間の視察では、十分な人数の優秀な先生方がいて、学生さんの取り合いがあるというくらい、教授陣は非常に陣容が整っていらっしゃるということがよくわかりましたので、AあるいはA+でもいいかなと思います。

○平澤分科会長 50人余りでしょうか。だから、1割程度の面接をして、そのうち半分くらいを採用しようかというくらいのつもりだったんじゃないかと思うのですが、これだけ採用できたということは、私は非常にうまくいった方だろうと思います。通常、優秀な人材であるほど結構取り合いをやっているわけですから、ほかに持っていけないで採れたということは非常に立派なことだと思います。

これは、A+にしましょうか。

○遠藤分科会長代理 開学するに当たって大変いいと思います。

○平澤分科会長 そうですね。それでは、これはA+ということにします。

それから、その次はブロック番号の8から10までで成果に関しての部分ですね。これも、実績の資料の方を拝見してみて、随分研究自身の内容も充実してきたということがよくわかるような中身ですね。ですから、ようやく研究自身も軌道に乗ってきたというふうに考えていいかと思います。

これはトップクラスを目指すということになっていますが、インパクトファクターが8以上くらいにあってインパクトが非常に大きいというふうに思いますが、それが4分の1くらいですね。だから、本当はトップレベルならばもう少しあってもいいかと思うのですが、これは今の段階ではAのままでよろしいでしょうか。

それから、次はブロック番号の11、12、13で学生に関しての話ですね。学生の採用というか、受験するような下地をつくる意味でのワークショップということですね。このワークショップも、ここで国際コース・ワークショップを8回というふうにあります。資料では9回になっていたような気がするのですが、あるいは数え方が違うのかもしれませんが。それから、そのほかに研究室の中でやるセミナーというのが非常にたくさん行われているようですね。ですから、これも軌道に乗っているし、ワークショップを通じて受験生を集めるという趣旨も十分達せられているかと思うので、これもAのままでよろしいでしょうか。

○遠藤分科会長代理 文句の言いようがないです。少なくとも全部じゃないんでしょうけれども、いいファカルティの応募があったというのは、そういうことからやはりあるんじゃないかと私は推測しています。

○平澤分科会長 なお、資料の方にあるアンケート結果を見ると、優、良、可、不可という4段階の中で可が付いているのがわずかにあるんですね。さすがにセミナーの内容に関して可というのはなかったし、それから事務局というのは良もないくらいですね。だから、非常によかったと思うのですが、旅行とか、それからエクスカージョンとか、そういうと

ころに可というのがばらばらとあるような感じなので、付随的と言えれば付随的な項目かもしれないけれども、この辺は主催者の側でももう少し考えなければいけないことなのかもしれません。

多少不満を持つ人がいたということで、食事というものに可というのが1人いたんだけど、これは沖縄の食事が口に合わなかったのかもしれない。でも、本当にわずかな人で大部分は満足して帰られたというので、そういう意味でも成功であるということでしょうね。

では、今のはAとして、次の項目は「大学院大学の設置の準備」ということで、14、15、16、17までです。これも予定どおりいったということでしょうね。

○遠藤分科会長代理 これは、日程でいつに認可とか開学とか一応伺っているのですが、途中で何か指摘されたり、そんなことはあったんですか。その辺は私たちにはわかりませんが。

○平澤分科会長 何か文書がありましたね。

○樋口専門官 大学設置審査の関係ですが、審議会側から審査意見が付されています。その中でも特にしっかり対応するようと言われているものが2つあります。

「沖縄科学技術大学院大学」という名前を使っているけれども、科学が中心になっていて技術が弱いのではないかというのが一点、もう一つは教育カリキュラムが体系的にできているかどうかが明らかではないということが指摘されました。後者の教育カリキュラムの指摘については追加資料を提出し、やりとりは収束していますけれども、技術が弱いのではないかという指摘についてはまだ追加説明を求められています。今度、審査を行っている大学設置・学校法人審議会分科会の先生方との現地での意見交換があるんですけれども、その場でまた説明をするということになっています。

○平澤分科会長 この申請の段階という年度末、3月末までに設置審に申請するというのはどういう資料までが必要だったのでしょうか。年度を越えて本格的な資料を提出したんですか。

○樋口専門官 基本的には教育課程とか教員も含めて、3月末の締め切りに間に合うように提出しています。6月末に提出したものは財務諸表などもともと年度末には出せない性質の資料だけです。

○平澤分科会長 1つは、やはり今までと違ってこの対象年度、22年度になって非常によくなってきたというのは、開学に向けての取組それ自身もそうなんだけれども、やはりドーファン先生が学長予定者として着任されて、学長予定者として将来の仕事の地固めを本気になっておやりになったというのが大きいと思います。

それで、どこかでそういうことが評点として出せないかと思っただけなんですけれども、これは総合評価表の中で文章として入れるというのはひとつあり得ますが、多少関係するとすれば、主にはこの大学設置に関係した部分というふうに考えてもいいのかなと思いますけれども、どうでしょうか。

○牧野専門官 事務局の方でつくった案段階では、項目の14のところで、学長予定者の主導の下、開学準備は適切に進められ、機構もきちんとそれをサポートした、というような形で、その点を簡単にコメントしております。

○平澤分科会長 そうですね。コメントの下に更に付け加える形というようになっているんですが、私が、今こういうふうに言っているのは、ここもA+にしたらどうでしょうかねという御提案なんですけれども、甘過ぎますか。

○遠藤分科会長代理 というか、私はどこに入れるのかは別ですけれども、前の年度から今年の年度というのはたいへんいろいろなところで進歩されたんですね。前の年度は特にお金の問題で様々な問題があったんですけれども、その後遺症を乗り切ってしっかりとちゃんとあちこちの分野が進むようになった。

これは大変なことだと思うんですけれども、それをその全体の中でどこに入れるというのがあるかと思います。そういうことにもめげずいい教員を採用できたとか、そういうことにもめげずこういうことができたとか、2、3個そういうものがないと全体として言うときにもまた困るんでしょうね。これもそうかもしれないですね。

○平澤分科会長 そうですね。1年前の状況を考えると、まずは事務方が歯抜け状態だったわけですね。中心になる人が非常に少なかった。ですから、バックマン理事が一人で頑張っているけれども、さばかなければいけない事項というのが急に増えてきて、それがどうも間に合わないというような状況だったわけですね。

だから、我々は沖縄で特にそういう点についての組織的な体制の立て直しであるとか、そういうことについてかなり強くお願いをしたような記憶があるんですけれども、今回お伺いしてみるとその後、採用された方が説明される内容も実に的確だったりするんですね。ですから、ようやく組織として動くようになったというような気もしないでもないです。

これは、事務局長の高野さんが頑張っておられるのかもしれませんが、そういうこと全体が非常にいい方向に転換できたということをごどこかでやはり指摘しておいた方がいいかと思います。

事務局だけの話で言うと、やはり一番の基はドーファン学長予定者でしょうね。だから、この「学長予定者の指導の下で」というところを太字にするくらいの感じで、ここをA+にしましょうか。

○遠藤分科会長代理 いいですね。あえて反対するようなことではないと思います。

○平澤分科会長 学生の採用についても、そんなに心配しないで済むような状況になったと思います。これも非常によくなった。

このところもかなり去年よりは危惧をしていたのですが、学生の採用のことに関係しても大学院生に対する経済的なサポート、これはやはり世界のトップクラスでないととてもまずいだろうと言っていたわけなんですけれども、これを日本の大学の中でも最も優遇されているような処遇になるようなことをお考えですが、これはやはりドーファン学長予定者の御努力にあるんじゃないか。ほかのところからの寄附金を集めてくるとか、はっきりは

おっしゃらなかったけれども、そういう中で処遇できるようなことでした。ドーファン学長予定者は非常に慎重におっしゃっておられたけれども、公的資金だけではとてもそういうことはできないので、そのところは頑張られるんじゃないかと思います。

それから、次は 18 で広報とか情報発信に関係しての話です。これについても特に問題はなかったし、よくやられているので、A のままでよろしいですね。

それから、次は 19 だけです。「業務の効率化に関する目標を達成するためとるべき措置」として「管理運營業務の効率化」、これは ERP 等の話に関わってきます。それから、事務部門の整備、これも前は B じゃなかったかと思いますけれども。

○遠藤分科会長代理 これは、まだ私はちょっと危惧の念を抱いているんです。

というのは、いろいろな業務が本格的には回り出していないと思うんです。だから、今、用意されたものだけで全体が回るのかどうかというのはちょっとまだわからないので、おっしゃるとおりのレベルにいったらまあまあかなというくらいです。本当に十分な内容の ERP になっているかどうか、まだ確かめようがないんです。

というのは、世の中で売っている ERP などでは、学園のいろいろな仕事の全部カバーできっこないわけです。そうすると、要するにもうちょっと御自分たちで工夫していろいろなものをプラスアルファしていかないと、導入した市販の ERP だけですべて管理ができるというわけにはいかないんです。何かこの間の話だと、経費の処理とか、そういうことばかりになっちゃっているんで、ERP というのはそういう部分だけじゃないんですよと言いたかったんだけど、目をつぶっておこうと思っていたんです。

○平澤分科会長 遠慮されることはないと思うんですが、コメントのところで今の 19 の一番下のところに、「今後の業務量の拡大に向け、ERP の活用及び効率的な組織づくり等により、一層の効果的・効率的な業務遂行に努められたい。」と。

○遠藤分科会長代理 それにとどめてもいいんじゃないかと思います。

○平澤分科会長 そうですね。滑り出してはいるということで、去年はここまではなかったの、たしか B だったと思うんです。

○牧野専門官 この項目自体については、去年は A となっています。

○平澤分科会長 A ですか。そうすると、どこか別のところだったかな。

○牧野専門官 事務処理に関する項目では、事務局における人の配置とか、そういうところが B だったかと思います。

○平澤分科会長 では、A でいいですね。

○遠藤分科会長代理 でも、これは今後のあれとしてよく気をつけられておいた方がいいですよ。これはまだまだこれから経験しなければいけないことが随分あると思います。だから、どなたが書かれたか知らないけれども、ここに書かれているコメントが大変よろしいんじゃないですか。

○平澤分科会長 では、次は 20 と 21 で「予算の適正かつ効率的な執行」です。これについても、今年度に入ってからというのは特に問題になるようなことはなかったのではない

かと思いますが。

○遠藤分科会長代理 これは、よくやられていたのではないのですか。幾つか質問をしたときに、皆さんがかなり争って答えたくなくて、あれもやっている、これもやっているという感じでしたから、まあまあだったのではないですか。

○平澤分科会長 では、これはAということで、次は22、23で「入札・契約の適正化及び調達事務の効率化」です。これについても、添付資料の方を拝見しても、いわゆる競争入札というものに努力していて随意契約は極力減らそうということはやっておられます。ただし、一者応札というのが、これは研究機関の特殊性ということがあって、かなり高い率になっていますね。だから、普通の事業独法と比べればまずいということになるんだけど、研究独法の中で比べるならば特に私は悪い方ではないと思います。

では、これもAのままでよろしいですね。

○遠藤分科会長代理 特に、いろいろな研究用資材の一括購入とか、機構の施設内の資材ストアを設置するとか、ああいうところも含めて取引業者との間の透明性がよくわかるような工夫をされていたので大変いいのではないかと思います。

○平澤分科会長 次が、「給与水準の適正化」に関してで、24、25です。これは、ラスパイレスはいろいろな根拠で比較をして、あるいは年度ごとの比較をして、それぞれ改善されているという結果だったように思いますので、これもAのままでよろしいんじゃないでしょうか。

それから、次は26の「保有資産の有効活用」です。これはかつてシーサイドハウスの利用状況が問題になったわけですが、ワークショップ等を共催する際に使うようになったということを含めて、去年の実績では実働で七十何日というふうになっていましたね。それから、2か月半、埋まっている日にちだけでそれくらいなので、前後準備で予定を入れることができないといったようなこととか、それから土曜、日曜を挟むとか、そういうふうなことを入れていくとすれば、非常によく利用できているのではないかと思います。

ですから、この点もAのままでよろしいかと私はと思いますが、いかがでしょうか。実際に、これは行政刷新会議とか総務省から見るとどうなんでしょうか。利用効率というのがよく言われるわけですがけれども、今のシーサイドハウスの昨年度の実績くらいではやはりよく利用しているということにはならないということでしょうか。

一昨年の評価に、共催して利用するとか、利用の形態を拡大して云々といったようなコメントを付けたような気がするんだけど、実際にそういうことをおやりになり、その数はかなりあるんですね。ですから、それなりに努力されているというふうに考えていいんじゃないでしょうか。

○牧野専門官 もともとシーサイドハウスに事務局が入っていたところ、キャンパスができ、事務局がそちらに移転した後のシーサイドハウスの有効活用を図るべき、ということを一昨年くらいに評価の中で御指摘いただいたり、行政改革関係当局などから指摘されたりしていました。そういう指摘に対応するような形で利用方針が立てられ、利用状況も整

理されているのかなと思います。

○平澤分科会長 以前のワークショップの開催回数だけだったら、いかにも少ないというようなことは多分行革部局から言われたような気がします。それに対して、地元に開放するとか、それから今のように関連した学会と共催してワークショップ等を開くとか、というようなことをやって、利用の拡大に努められたということだろうと思います。これも A のままということにしましょう。

それから、27、28、29 の効率的な事業の実施です。これは監事の話で、これも随分改善されたというふうに考えていいですね。年度計画は当然のことだし、組織改善もこの中に含めているんですね。

○遠藤分科会長代理 やはり監事が必ずこういう会議に出席するというふうになったのはすごく大きいんじゃないですか。前はほとんどいなかったわけでしょう。勝野監事になってからきちんと出られて、いろいろなところで何かあったことを必要に応じてコメントされるというのはやはり大きいんじゃないですか。

それから、ちゃんとしたエグゼクティブ・コミッティというのができて定期的に開催される。ここは、本当にある意味では組織として動けるような体裁がきちんと実質とともにでき上がったということで、ひょっとしたら A+ かもしれないですね。

○平澤分科会長 そうですね。常勤の監事というのも非常に大きなポイントですね。それと、やはり高野事務局長が就任されてエグゼクティブ・コミッティがうまく動くようになったということですね。これは A+ にしましょうか。

○遠藤分科会長代理 さっきから、A+ がもう一つくらい必要かと思っていたので。

○平澤分科会長 これは、ヒアリングをしても、本当にこんなに変わったのかというくらいいよくなっているという印象でしたからね。

それでは、次が 30、31 の財務内容です。これは先ほどの財務諸表についての議論で特に質問は求めなかったのですが、前回御報告されたままでいいかなというふうに思います。長岡先生、何かお気づきのことはございますか。

○長岡委員 特にありません。

○平澤分科会長 よろしいでしょうか。今の財務諸表の話のほかに、ここでは外部資金の獲得の話があるんですね。これについては、目標が低いといったのが大分高くはなってきたんですね。今年の目標は 1 億 2,000 万ですが。

○遠藤分科会長代理 普通というのではないんでしょうけれども、このくらいの研究者の陣容を備え、施設があればだけのものができ上がると、一体どのぐらい助成金だとかというのは何かないんですか。

○平澤分科会長 ありますよ。これはちょっとまだ本調子ではないと思われます。

○遠藤分科会長代理 最低、年間 4、5 億はあっていいんじゃないか。順調になった暁には、ということですが。

○平澤分科会長 もともとは文科省の資料なんですけれども、研究者一人当たりに割り付

けたときに幾ら外で稼いでいるかとか、それから申請した件数に対してどれだけもらえたかとか、いろいろな指標でのランキングがあるんです。

その中に入れると、これはまだトップクラスではないですね。だから、去年に比べれば目標は随分高くなってきたと思うけれども、もともと外部にお金を申請するまでもなく、たくさんのお金があるというような非常にありがたい状況に甘んじていたというようなこともあるんじゃないかと思います。ですから、これはもっと頑張ってくださいということで、さらなる取組に期待したいとコメントにありますけれども、そういうことでよろしいのではないのでしょうか。

それから、35、36、37 ですが、具体的には 35、36 の施設です。昨年度の話というのは、第 1 研究棟が使えるようになったということがありますが、第 2 研究棟と講堂の工事は今年度になってからですか。

○松下専門官 昨年度からです。

○平澤分科会長 昨年度からですか。いずれも順調に進んでいるということでもいいんでしょうね。これも A と。

○遠藤分科会長代理 特に第 1 研究棟を使い始めてから時間がたっていますよね。我々が去年行ったときは研究者が入ったばかりぐらいでしたが、今年はちょうど 1 年くらいたっていたんですね。それで、どういうふうな状態になったかなと私は思っていたんですけども、我々が行くから掃除をしたのかどうかはわかりませんが、かなりきれいに使われているなというふうに思いました。いろいろな人が使っておられる割にはかなり丁寧に使われているんじゃないかということで、やはりその辺は皆がすごくいい規律を持っているなという感じがしました。

○平澤分科会長 それから、第 1 研究棟について言うと、施設が何か落ち着いた感じですよ。もう使いこまれていてなじんでいるという感じになっていましたね。

それで、危惧していたのはビレッジゾーンの整備ですね。これがどういう方式でやるのかということが、去年の段階ではまだ決まっていなかったのではないかと思います。しかるべき PPP の形で動くようになったということで、これも私は非常に大きな課題だと思っていたんですけども、うまく動くようになったということで A のままでいいんじゃないのでしょうか。

それから、次は人事に関する事項で 38 から 42 までです。これは、事務職員の採用の話と研修等ということですが、着実に実施されているということでよろしいのでしょうか。

○遠藤分科会長代理 この事務員、技術員、研究員というのは中期計画で言ったときに、この年度はこのくらいの割合でこうなっているように持っていきたいという数字と比べてどうなっているんですか。

○平澤分科会長 それと、職員の沖縄出身者の割合とか、そういうものはたしか何か率、目標値があったような気がしますね。

○牧野専門官 中期目標や中期計画の中には、特にこれらに関する具体的な数値目標はあ

りません。

○遠藤分科会長代理 トータルの人数もないですか。

○牧野専門官 トータルの人数は、常勤の定年制職員の数については 30 人というのが計画上決まっているんですけども、それ以外の非常勤職員や任期付きの職員などを含めた形で、具体的に何人を目指すということはありません。

○遠藤分科会長代理 そういうものがなかったというのは、元が余りよくないですね。

○平澤分科会長 沖縄出身者の採用に努めるとか、そういうような努力目標みたいな感じの文言はあったように思います。今回は積極的に採用に努めたというふうに書いてありますね。

○遠藤分科会長代理 わかりました。

○平澤分科会長 では、その次は事務局体制です。これは、開学に向けての転換の話も含んでいるんですか。先ほど A+にしたところとこれは多少重なるような気がします、監事のことまで含めれば、先ほどのところでよろしいですね。では、ここは A のままということですか。

次に、45 の「社会的責任を果たすための取組」です。これも、コンプライアンスの件で特に問題なかったかと思しますので、A です。

○遠藤分科会長代理 今の備考のところに、もう少し書いておいた方がいいんじゃないかと思えます。お話を伺ったところ、廃棄物とか、ああいうものについてかなり実態のところまで調査にいったじゃないですか。あれはやらなきゃいけないことで当たり前なんですけれども、ちゃんとやられていたということはやはり大変いいことで、今後もきちんと続けてほしい。そういうところで問題が生じると大変なことですから。

○平澤分科会長 では、廃棄物処理のトレースとか、何かそういうことに関連した文言を書き加えるということにしましょう。

○遠藤分科会長代理 要するに、具体的にちゃんとやっていますねという確認を我々もしたということにもなりますし。

○平澤分科会長 では、次に「地域社会との連携」です。これについては、キャンパスを開放してある部分までは入ってこられる。食堂とか展示の部分まで入ってこられるように開放するといったようなことも、かなり思い切ったことなんじゃないでしょうか。

○伊集院委員 昨年に比べると随分進みましたね。

○平澤分科会長 アウトリーチ活動とか、あるいはもっと言うと知的クラスターの活動とか、こういうところは本来ならばもう少し力を入れてほしいという気はします。ここで言うところの地域社会との連携というのは、むしろ地元とのことでしょうか、今のようなキャンパスの開放とか、そういうことを含めてこのコメントにあるようなところでいいんじゃないでしょうか。

それから、次は 48 番の「環境に配慮した事業の実施」です。これも問題ないですね。特に、水処理等に関連して海にまで泥の濁った水が流れていかないように細心の注意を払っ

て工事をしておられるとかですね。これも A です。

それから、49 は「安全で働きやすい環境の整備」、ハラスメント等の話ですが、これは特に問題になったことはないですね。それで、もう一つは逆に保健センターができて、これも充実したという感じですね。これも A ということです。

一応今のようなことでよろしいのではないかと思います、翻って更に何かコメントが
おありならば承りますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

○伊集院委員 A+が増えましたね。

○平澤分科会長 増えましたね。

それでは、文部省の評価のことですね。

○牧野専門官 先ほど、御審議していただいた項目の一つで、大学設置に関する準備活動に関する部分ですけれども、ここについては、法律上、文部科学省と内閣府の共管ということになっておりまして、文部科学省の評価を聞いた上で内閣府の側の評価委員会で評価を行うこととなっております。それで、文部科学省の評価委員会での評価ですけれども、8月4日に部会が開催されまして、評価結果の伝達が既にありました。

まず、文部科学省の評価基準について若干御説明したいと思います。文部科学省の側は S、A、B、C、F という 5 段階で評価を行うことになっておりまして、当該年度に実施すべき中期計画の達成度が 100% 以上の場合について A を付ける。70% 以上 100% 未満の場合には B を付けるということになっていまして、70% 未満の場合には C で、S と F については必要に応じて適宜付けることができるというふうになっております。

沖縄機構の平成 22 年度の大学設置に関する業務実績の評価についてということですが、文部科学省の方では初代学長予定者が決定されたこと、文部科学大臣に対する認可申請が予定どおり行われたこと、大学設置に関する準備が組織的に行われたこと等の実績を踏まえて、大学院大学の設置準備活動を行う機関としてその役割を十分に果たしていると評価できる、ということですので、A という評価が付いております。

合わせて評価結果を踏まえた今後のとるべき方策ということも示されておりまして、規程類の準備だとか、優秀な学生を獲得するための募集活動に向けた準備等、着実な大学院大学の開学に向けた準備を進めていくことが求められるということがコメントとして付されています。

文部科学省の評価結果については、以上ということになります。

○平澤分科会長 S ではないということですね。

○牧野専門官 S ではないです。

○平澤分科会長 文科省はたくさんの法人を対象にしているので、ああいう堅い評価しかないんですね。計画に照らしてどうのこうのということですので、質というのをどのように考慮するかというと、余り考慮できるようなシステムではないと思います。

しかし、A ということなので、我々は A+ で、質を考えてもう 1 ランク上ですという判断をしましたという御報告でよろしいですね。

○遠藤分科会長代理 今の文部省の評価というのは単年度じゃないですね。

○平澤分科会長 年度ごと、当該年度においてということですね。

○牧野専門官 年度ごとにその年度の業務実績を評価するという位置付けでやっていると思います。

○遠藤分科会長代理 何となく、前の施設整備予算の使い過ぎの印象がまだ残っているんじゃないかという気が、私はしないでもないんですけども。わかりました。単年度ですね。

○平澤分科会長 計画に照らして云々ということだけで評価するというのは、実施者の側から言うと計画を低くつくればいいじゃないかという話になっていってしまうので、余り私はそれだけで評価するということにはしたくないと思っているんですが、よろしいでしょう。

さて、それでは次の総合評価表ですね。資料2-2です。これについて、私は前もって目を通しまして、ここに提案されている内容でいいかと思いますが、これは内閣府の場合、AとかBとか、そういうものは付けないでしたか。

○牧野専門官 内閣府の評価に当たっては、業務実績全体で今年はAでした、というような評価はしておりませんので、この表現振りで評価を示すこととなります。項目の立て方は基本的には項目別評価表と同じようになっているんですけども、3ページ以降、3ページの3の「法人の長等の業務運営状況」については、項目別評価表にはありません。あとは、総合評価という部分は業務実績の全体に関するコメントという形になっております。

○平澤分科会長 そういうわけなので、特に重要なのはこの3ページのⅢと、それから最後の欄の総合評価ですね。ちょっとこれをお読みになってコメント等があればどうぞ。

いかがでしょうか。Ⅲのところの主語が「理事長は」で始まる最初のポツですが、何か「学長予定者」という固有名詞が入った方がいいでしょう。理事長は学長予定者と協働してとか、そういうことでしょうか。

それから、監事については先ほどちょっと触れたように、「常勤体制の下で」というのを一言入れたらどうでしょうか。「日常的な監査業務に努め」でしょうか。

この総合評価の中のコメントで実感がこもっているコメントがあるわけですが、この1年間でよくここまで準備が進められてきました。現場の実査でも充実した活動が進んでいることがよくわかりましたというふうにあります、Q&Aでもすれ違わないということがない交換ができた。

何かございますか。

○遠藤分科会長代理 その1つ上の欄の今、平澤先生が触れられた学長予定者ですが、多分、私は学長予定者が7月に決まって、そこでやはり実際にやる人たちと一つひとつのことについての議論がよくされたと思うんです。そうすると、やっていることの理解というか、全体との関係をそれぞれのキーの人たちがよく理解し合ったために、我々とのQ&Aでも非常にクリアなロジックがちゃんと一致しているというか、口裏合わせをしたというの

ではなく、中身がちゃんと理解されているということが証明されるようなものであった。それから、それを監事がいろいろな形でサポートしてそういう方向へ持っていったというように私はこの間のときも非常に感じまして、その辺がⅢの総合評価のところに何か書かれるといいのかなと。

それで、総合評価のところは従来、予算超過問題に示されるように何となくばらばらだったものがきちんと締まってきたということで、それはやはり学長予定者と軸になる人たちのいろいろな考え方の共有といいますか、そんなことが組織としてきちんと動き出したことにほかならない。要するに、開学をするための準備がそういう面からはきちんとでき上がったように感じられると、こういうふうに書かれるといいんじゃないでしょうか。

○平澤分科会長 そうですね。我々が沖縄にお邪魔したときに、何か組織の理念のようなもの、ステートメントを紹介していただきましたね。あれはいつできたんですか。22年度中ですか。

○牧野専門官 6月に機構の職員全員が参加する会議の中でドーファン博士から職員に対して紹介されたものだと思います。

○平澤分科会長 そうすると、22年度の実績の中には入らない。

○牧野専門官 直接的には入らないかもしれません。

○平澤分科会長 あれは、6月におやりになった全体会議のときの原稿に相当するものですか。

○牧野専門官 6月にドーファン学長予定者が昨年7月の就任から1年たって、この1年間の成果として、こういうことがあったということを職員と共有するのと合わせて、今後の組織理念として示されたものだと思います。

○遠藤分科会長代理 ですから、それは22年の成果なんです。学長予定者が昨年7月から来て、それからの取組をまとめるとこうなっているというふうに言われたのであって。

○平澤分科会長 ですから、22年の活動の中でそういうことが固められてきて、実際に発せられたのは6月だけれどもというような理解でよろしいんじゃないでしょうか。

そうだとすると、今のような内容を踏まえてこの総合評価のところにもう一つポツを付け加えますか。

私が非常に感心したのは、組織を立ち上げるに当たってのリスクがどこにあるかということを経営者に見てもらおうということもおやりになっています。ですから、我々は言ってみれば今までこういうところが危惧されるとしてリスクの穴埋めをしてくださいということを言ってきたように思いますけれども、それをもう少し体系的に検討してみるといったようなことをおやりになっているんですね。

こういうものも組織運営の中で、従来日本の大学ではほとんど見られなかったようなアプローチだろうと思うんです。だから、そういう点でも多分、成果を上げる根拠というんでしょうか、背景としては今のようなことがあったんじゃないかと思います。その文章を確定するのはちょっと時間がかかるでしょうから、これは修文を私に一任いただけますか。

それを、今度は8月17日の親会に報告するということにさせていただきたいと思います。

それから、あとは中期目標期間中の実績の仮評価、これは2 - 3です。これを報告して、親会の方で決めるということですね。この中身について、ちょっと説明してもらえますか。
○牧野専門官 まず、そもそも仮評価とは何かということですが、この会議の冒頭にも申し上げましたが、沖縄機構の第2期中期目標期間というのは平成21年から23年の3年間になっておりまして、現在沖縄機構は中期目標期間の最後の年度に入っております。

通常の独法であれば、この最後の年度に次期中期目標期間を見据えてどうするかというような評価を行っていただいて、それに基づいて組織の見直し等を行うんですけれども、沖縄機構については学校法人に移行し、独立行政法人としては解散するということになっています。そのため、組織の見直し等に直接つながるような評価というわけでは必ずしもないんですけれども、この2年間のこれまでの業務実績について現時点での仮のものとして評価を行って、次の機構解散後の本当の最後の評価を円滑に行い、沖縄機構において、適宜活用してもらうということが、今年の2月の親会議の方で決まっております。

評価の項目等については見ていただければわかると思いますけれども、総合評価表と同じような形式となっております。沖縄機構につきましては「国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項」ということで、先ほどと同じように科学技術に関する事項だとか、大学院大学の設置に関する準備だとかというものがあって、そのサービスに関連しないものとして、「業務の効率化に関する事項」ということで「管理運営業務の効率化」だとか、「予算の適正かつ効率的な執行」だとか、その他効率的な事務事業の実施に関する取組などが挙げられております。その他に更にその他という感じですが、業務運営に関する重要事項として(1)ですけれども、施設・整備に関するものだったり、事務局体制の整備だったりというものがあります。このIに記載されている項目については中期目標に掲げられている項目に対応する形でこの表にも記載されております。

これ以降も総合評価表と同じですけれども、「その他の業務実績等に関する評価」ということで、何か特段コメントするようなことがあれば書くという形になっています。あとは、3のところで「法人の長等の業務運営状況」ということで、これも総合評価表と同じような形になっています。

それで、右側の「評価」というところで事務局の案ということで書かせていただいておりますけれども、昨年の総合評価表と先ほど御審議していただいた今年度の総合評価表等を合わせて、この2年間でどれくらい進捗があったのかというような形で実績を整理させていただいた上で、それについて評価をコメントするような形で一応書かせていただいております。

内容及び構成の説明につきましては大体以上です。

○平澤分科会長 ありがとうございます。結局、この2年間のうちの前の年というのはつまりいたわけけれども、立派にリカバーしましたという感じですね。そういうことで、結果としては先ほど見た総合評価表の到達点にまで中期目標としては達成されていきますと

いうニュアンスでよろしいかと思います。

文言として、もしお気づきのことがあればですが、今さらっと拝見してみて特に問題はないかと思いますので、これがもしあれば。

○遠藤分科会長代理 やはり先ほどのものと同じように、そこだけ留意してやっていただければと思います。

○平澤分科会長 そうですね。そのようにしまして、それでは17日に親委員会に提案させていただきます。ありがとうございました。

それから、財務諸表に関して、次は3番目ですが、これについて意見を述べるができるということになっているので、意見があれば特に発言するということです。これは、長岡先生の御意見をまずお伺いしておきたいのですが、いかがでしょうか。

○長岡委員 拝見しましたけれども、特にはないです。

○平澤分科会長 先回の場合はいろいろ問題があったのですが、今回も建設途上のものがあるわけですね。それで、特に第2研究棟等に関しては予算が付いて、一部それが足りて支払われているということになるのでしょうか。そういうことの事業が全部というか、きりのいいところで終わっていない段階でのまとめということになっているかと思います。この組織は年々非常に大きく対象が変わっていくので、前年度と比べてどうこうといったようなことは余り意味がないんですけれども、私は16ページの「8.セグメント情報」に興味があるのですが、研究ユニットと研究サービスというので、一番上の欄の業務費がユニットの方に多少、多目にあるんだけれども、共通サービスのところにかんがりの部分があるというところがやはり特色ですね。それから、管理費が結構大きいですね。5分の1くらいですか。

いかがでしょうか。特に意見なしということではよろしいでしょうか。長岡先生がごらんになって特に問題がなければ、会計上、経理上は問題ないとして。

○遠藤分科会長代理 処理上は全然問題ないと思うんですけれども、減価償却費は大きいですね。やはりあれだけ立派なものがあるから、メンテナンスするだけでもこれからずっと費用が結構かかりますよね。

○平澤分科会長 それでは、財務諸表に関しては特別な意見なしということで報告します。

あとは、「その他」の事項ということになるかと思いますけれども、スケジュールでしょうか。

○牧野専門官 スケジュールというか、今後の流れについて若干御説明したいと思います。

資料4の「学校法人移行に向けたスケジュールと今後の評価の流れについて(イメージ)」という縦長の1枚紙ですけれども、そちらの方をごらんいただければと思います。

若干御説明ということで、今後の評価の流れについて御説明したいと思います。今は8月ということで、本日、分科会で評価の方を行っていただきました。これで来週、親会の方に平澤先生から報告していただいて、あとはものによっては親会の方で審議していただくというものがあります。

順調にいけばですけれども、本年の10月末に文部科学大臣より認可が得られるということになっております。それで、その認可が得られた後に、学校法人の沖縄科学技術大学院大学学園というものを設立するわけですが、これが大体認可が得られてから数日もしくは数週間ということで、大体11月中には設立されることになるのではないかと考えております。

それで、この学校法人が設立されるのと同時に、独立行政法人である沖縄科学技術研究基盤整備機構については解散するというふうになります。独法は解散するんですけれども、この学校法人が独立行政法人沖縄機構の最後の業務実績等について評価を受けるというふうなことが決まっております。通常のスケジュールを前提とすると、この11月に独立行政法人が解散して以降、2月か1月に機構からこの期間中の業務実績報告書や財務諸表等の提出がされるということになるかと思えます。

それで、一番右の分科会の欄の2月のところですが、1月中もしくは2月初めにその財務諸表等の書類が出てきた後に平成23年度の業務実績、7か月分の業務実績ということですが、とあわせて中期目標期間の2年7か月分の中期目標期間の業務実績についてヒアリングを行っていただきます。必要に応じてまた現地視察を行っていただくことになるとも思いますけれども、その後、また審議していただいて、業務実績の評価、年度評価の決定及びその中期目標期間の業務実績について分科会としての案を決定することになるので、大体3月中に最終的な決定にまでいければと考えております。

まだこちらの方は具体的に法人設立のスケジュールがどうなるのか、親会との兼ね合いもありますので、実際にこのとおりにいけるのかというのはやや不確定なところがありますけれども、大体今年度の後半にもう一度評価の方を行っていただきたいと思いますと考えております。以上です。

○平澤分科会長　そういうわけで、7か月分をもう一度、今度は冬の時期にやるんですね。そういうことで、合わせて今回の2年プラス7か月分の中期目標期間の評価ということも行う。これが、我々の活動としては最後になるかと思えます。したがって、1回だけで終わるかどうかはわかりませんが、もうワンシリーズあるということで、引き続き先生方にはよろしくお願いいたします。

そういうことで、今日の予定は以上です。

それでは、第22回分科会を終わります。どうもありがとうございました。

(注) バックマン理事の発言部分については、会合の場における通訳によるもの。